

3. 平野部のはなし

へいやぶのはなし

山間部

の厳しい地形を勢いよく流れてきた一ツ瀬川は、最後の杉安峽を抜けると平野部にたどり着きます。平野部は気候が穏やかで地形の起伏が少ないことから、西都市の中心街をはじめ、大小多数の集落が広がります。また、農作物を育む広大な農地が流域に広がり、広々とした田園風景を作り出しています。



平野部

は、昔から人の往来も多く、日向街道や舟運などにより多くの文化・文明がもたらされました。江戸時代、この辺りを治めていた佐土原藩では、新たな文化や民芸が生み出されています。また、山間部では見られなかった古墳がたくさんあり、その代表である西都原古墳群には毎年多くの観光客が訪れます。それ以外にも、南方神社内の巨大なクスの木や、国分寺、長谷観音、伊東マンショゆかりの都於郡城跡などの名所が多く存在します。



ひとびと

人々

の生活に目を向けると、昔は橋が架けられていなかったため、主要な街道や人々の生活道路が川にぶつかる場所には「渡し」と呼ばれる川を渡る場所がありました。川を渡る方法には、舟、単板、徒歩（川の中を歩く）などさまざまな方法がありました。その後、その渡しに木橋などをかけるようになりましたが、洪水のたびに流されてしまいました。そこで人々は、潜水橋という、洪水を受け流すことができる橋を架けるようになりました。現在でも潜水橋は利用されており、当時の知恵を知ることができます。

すぎやす 杉安

から下流の平野部は沖積平野で形成されるため、ここからの一ツ瀬川は緩やかに流れていきます。しかし山間部とは異なり、洪水のたびに川の流れる位置が変わり、農作物が収穫できなくなるなどの被害を及ぼしました。洪水が人々の生活に与える影響が大きかったことから、昔から治水事業による河川改修を行ってきました。その歴史は古く、江戸時代の佐土原藩時代にもその記録が残っています。



さどわらはん 佐土原藩

のしくみの中で、治水関係を担当する井出方という役職がありました。井出方は佐土原藩で最大規模の役所であったことから、いかに治水事業を重要視していたかがわかります。



へいやぶ 平野部

で収穫された農作物や、山間部から一ツ瀬川を流して運んできた木材などは、小型の舟やいかだで河口の福島港へと運ばれ、和船（千石船、当時の大型船）で主に大阪方面へと出荷していました。佐土原藩は各舟から税金を取り、それを貴重な収入源としていました。よって、舟運を安全に行い、通過する舟を増加させることは、藩の収入の増加につながったのです。そのため、井出方という役人が行った、浅い箇所の浚渫、船着場の護岸などの治水事業はきわめて重要だったのです。

近代

になり、昭和7年（1932年）から公共事業としての河川改修事業が開始されました。宮崎県は、一ツ瀬川を県内で最初の河川改修事業として取り掛かりました。その後戦争による中断をはさみ、河川事業は続けられ、約半世紀を経た昭和58年の古川樋門の整備でほぼ完了しました。



支川

の三財川、三納川、山路川、八双田川、川原川でも、黒木旧三納村村長（砂防村村長）などの働きかけもあり、捷水路や築堤護岸などが整備され、改修が完了しました。



治水事業

が積極的に行われた理由のもう一つに、一ツ瀬川流域の平野部で豊富に収穫される農作物の存在があります。この豊富な農作物の生産の礎となったものに利水事業があげられます。なかでも、児玉久右衛門による杉安井堰と金丸惣八による金丸堰、松本覚兵衛による伊倉用水路は、一ツ瀬川流域における利水事業の代表格といえます。これらの堰や用水路により、広大な田畑が新しく作られ、農作物が豊富に収穫されるようになりました。

